

## 館山海軍航空隊と赤山地下壕の建設から占領軍上陸へ

高橋博夫（館山市沼在住、元館山市教育長）

1923 年の関東大震災で隆起した海を埋め立てて、1928 年に館山海軍航空隊（以下「館空」）の建設工事が始まった。まず埋立地を囲うように伊豆石を積み上げ、赤山の南側を削った土砂を使い、高ノ島を内包する形で埋め立てた。足りない土砂は、館空の本庁舎裏側の段差（現在の海上自衛隊本庁舎裏手の崖の部分）を削って使った。滑走路の部分は大林組がサンドポンプで浚渫して海の土砂を入れ、その上にコンクリートで固めている。東西 800m の滑走路がつくられたが、塩分を含む砂のため芝も植えられず、あまりきれいな状態ではなかった。通称「陸の空母」と呼ばれ、航空母艦に見立てたタッチアンドゴー（離着陸）の訓練をすることが特長だった。

私は 1927 年生まれだが、まもなく館空建設のために、漁業者の多かった宮城区を中心に多くの家が移転を命じられ、「第 1 次疎開」が始まったという。私の家（館山市沼 1016 番地）も、1929 年 2 月 28 日に海軍へ売却し、現在地（館山市沼 966 番地）に移転して翌年に家を建てた。寛永年間から続いていた元々の我が家は、今も道路脇に残る井戸の痕が目印になっている。西原区は岩盤の水脈があり、掘れば水が豊富だったが、館空は人が多いので宮城の山の中に水源地を求め、1931 年にダムが作られた。道路に沿って赤山の地下に水路を作って館空に水を引いた。

館空の南側にある赤山は、以前は頼忠寺山または寺山と呼ばれていたが、いつの頃か赤山と呼ばれるようになった。館山湾に面して城山（里見氏館山城跡）と並ぶランドマークということで、海軍が赤山と呼び始めたのではないかと思う。地下壕建設が始まると、土砂（ズリ）を捨てるために、館空から東に続く砂浜を埋め立てて港の岸壁が作られた。この工事に伴い、赤山のズリを運搬するために「第 2 次疎開」が行われた。その境界線は高いトタン塀で囲まれて、内部が見えないようになり、今もその痕跡として並んだコンクリート柱が残っている。

砂利道に軽便鉄道用のレールを敷いた道路が作られた。台車に載せた箱に土砂を入れて固定したトロッコを押して下り、海岸の埋立地まで運んだ。道路は傾斜なので、帰りは「ヨイショ、ヨイショ」と上げるのが大変だった。4～6 台が後ろにつながったトロッコには、それぞれブレーキ係がいた。台車に丸太を付けただけの簡便なブレーキ装置に自分の全体重をかけ、煙を出しながら止めていた。とても重いので、勢いよく曲がった時には横転してしまい、怪我人も多くいた。

そのうちに軽機関車で引っ張るようになった。能率的になったが、道路の交通止めをしなくてはならなくなり、踏切番のおばさんが立つようになった。今も信号機の脇に当時の踏切台の痕跡が残っている。おばさんたちは毎朝、トロッコの車が滑らないようにレールに砂を撒き、所々に油を撒いていた。おじさんたちは台車を組んでトロッコを作っていた。家のそばにレールや台車の置き場があり、子どもの頃は唯一の遊び場だったが、危ないとよく怒られた。

赤山地下壕建設のトロッコ作業はハワイ真珠湾攻撃の前から行われていて、1940 年頃だったと思う。掘削の方法は、最初はツルハシだったが、次はダイナマイトを使っていった。サイレンや笛で安全を確認してから爆破させていた。地下壕は大体ツルハシだった。ツルハシはすぐに刃こぼれするので、脇の掘っ立て小屋に鍛冶屋がいた。鞆（ふいご）で風を送って火力を高め、鉄を赤く熱して刃先を叩いていた。赤山の作業には様々な職業の人が徴用されていて、陸軍の兵士も駐屯してきた。銃とか剣もなく年配の招集兵で、赤山を掘削する労働者だった。西の浜には赤山を掘削している会社の組頭がいた。その後は日本人だけでなく、朝鮮の方々も多くいた。

1926年に作られた青山学院水泳合宿所は赤山の前にあり、当初は宮城の浜に行っていたと思う。館空建設後は遠回りをして柏崎浦の海岸に行っていた。不便になったので、買い上げてくれと海軍に言ったところ、要らないと言われたらしい。しかし1941年になると、今度は海軍から買収したいと言われ、有無を言わず譲渡させられている。地下壕の建設に関係しているのではないか。

戦争が激しくなるとB29爆撃機による本土空襲が始まり、1945年には館空周辺の家屋もみんなバリバリと機銃掃射を受けた。そのため、家屋の間引きも合わせ、「第3次疎開」となった。

沖縄戦から本土決戦が叫ばれるなか敗戦となり、今度は占領軍の上陸となった。我が家脇の道路から西へ向かって洲ノ埼海軍航空隊（以下「洲ノ空」）までが占領地と決定し、この区域は日本人が住めなくなった。8月27日に「第4次疎開」が通知され、29日までに退去せよという命令だった。みんな着の身着のまま市内の親戚などへ移り、占領は約5か月続いたと思う。4回とも疎開になった人もいた。木村屋旅館に館山終戦連絡事務所が設置され、館山市民には「米兵が上陸してくるから一切戸締りをして、外に出ないように」という命令が出た。

先遣隊は館空前の岸壁に上陸することになった。我が家は館山湾を見晴らせる高台にあるため、館山終戦連絡事務所から家を貸してほしいと依頼があった。主要な人たちは岸壁へ行き、数名が我が家に待機して、何かあった場合の連絡中継地となった。一般市民の家は全部戸を閉め切って見ることはできないが、残った関係者は我が家からそっと上陸の様子を見ていた。

30日、まず上半身裸で緑色の短パン、腰に拳銃をつけて岸壁を上がってきた。みんなその姿に驚いたが、先遣隊の中でも海兵隊の機雷などの危険物を処理する特殊部隊で、雇われた荒くれ者だったらしい。午後1時半に、将校5名と横須賀から兵士111名がやってきて、軍や終戦連絡事務所との交渉が始まった。後から分かったことだが、館空は問題が多く調査に手が回らないため、31日さら200名余が投入されたという。ジープは上陸していなかったため、館空の車やトラックを使って市内の施設を巡回して、本隊の上陸に備えて調査を進めていたようだ。

戦艦ミズーリ号での降伏調印式の翌9月3日、本隊の第8軍112騎兵連隊が上陸してきた。館空の水上班滑走台に向けて上陸用舟艇6隻ぐらいで来て、秩序正しく一斉に降りて来たのを見た。これが『あわがいど』のガイドブック表紙になった写真である。軍服に騎兵隊マークがあり、星条旗が堂々と掲げられ、占領地となった。我が家の横から西側へは鉄条網が張られ、歩哨の衛所が作られ、機関砲がこちら側に向けて設置された。完全に閉鎖され、市民は朝6時から夕方7時までに外出が制限された。いわゆるカニングムによる6項目指令が出され、直接軍政が始まった。

4日間で軍政は解除となったが、洲ノ空を通る道路の進入禁止のままなので、西岬国民学校への勤務は神戸経由の遠回りで通った。衛兵は戦闘服であったがフレンドリーな感じだったので、片言の英語で親しくなった。学校長と子どもたちの了解をとり、私はテキサス出身というその兵士を学校へ連れて行って話をさせたが、余り教育を受けていないようで読み書きが苦手だった。

また、「日本の生活が知りたい」という士官を2名、我が家に招待した。靴を脱ぎ、畳の部屋で座布団に座る習慣や、床の間や欄間などの日本家屋に興味を示した。お土産に何が欲しいか尋ねたら、鎌倉彫などの彫り物や瀬戸物などの茶碗を希望した。彼らからは文化度の高さを感じた。

館山病院の穂坂与明院長や川名正義副院長らは国際人であったので、占領軍との直接交渉や軍医の視察があったらしい。10月頃には院内に米兵による英会話教室が開かれ、私も11月に少しだけ通った。市内には米兵向けのお土産屋も開かれた。先遣隊の時には事件もいろいろ起きたが、占領軍本隊とはこのような交流が生まれ、戦後日本のスタートとなっていた。

⇒【証言の会（録）P.18参照】